財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団広報誌

南ぬ風

Vol.11
2009.4～6
春号

［南ぬ風インタビュー］「海洋文化館」を海洋文化の拠点に。
南山大学人文学部人類文化学科教授/後藤明

《沖縄の色・形》伝統が育んだしなやかさと繊細さ/宮古上布

南ぬ風（ふぇーぬかじ）

誌名『南ぬ風（ふぇーぬかじ）』について
「南ぬ風」は梅雨明けとともに南から吹き込んでくる強い風のことです。この南の風によって育まれてきた沖縄の自然や文化をさらに「南ぬ風」に載せ全国に発信することを意味しています。

CONTENTS

03 南ぬ風インタビュー　Vol.4
「海洋文化館」を海洋文化の拠点に。
南山大学人文学部人類文化学科教授／後藤明

06 沖縄の色・形
伝統が育んだしなやかさと繊細さ　宮古上布
取材協力／宮古織物事業協同組合

08 沖縄の自然　南の島の植物と動物たち
シリーズ沖縄の大木④　リュウキュウマツ
シリーズ沖縄の希少動植物④　オキナワテンナンショウ／タメトモハゼ

10 沖縄の民話
蟹の恩返し　資料提供／NPO法人沖縄伝承話資料センター

12 首里城公園の管理運営
御庭案内　華麗な王朝文化の旅へと誘います

14 財団の事業紹介
亜熱帯性動植物に関する調査研究・普及啓発事業
不格好な花序をもつ巨大コンニャク／沖縄における都市緑化植物としてのツバキの活用／イルカを飼育して分かった事／ウミガメから学ぶ環境学習「サンゴの海」が出来るまで／ハブクラゲの被害防止について
首里城に関する調査研究・普及啓発事業
往時の漆の塗り技法を再現！／皇帝御書扁額『輯瑞球陽』、『永祚瀛壖』の制作

18 公園ニュース＆イベント情報
海洋博公園
・海の危険生物展／サンゴの卵と幼生観察会／春休み イルカ学習会／イルカラグーンバックヤードツアー／ハイビスカス展／ハス乗り体験会／サンダンカまつり／植物園ガイド／植物のクラフト作り
首里城公園
・平成21年度 首里城公園「舞への誘い」
・鎖之間のご案内
・年間パスポートのご案内
・首里城公園友の会のご案内

20 ふしぎがいっぱい公園点描
おもろ植物園　海洋博公園

表紙について

石垣道

名嘉睦稔（なかぼくねん）
一九五三年伊是名島生まれ。版画家。造形作家。月桃紙に裏手彩色と呼ばれる技法で制作される作品群は、われわれ現代人が見過ごしてしまいがちな大自然の機微、生きとし生けるものの魂の声を、時に優しく、時に力強く、私達に伝えてくれる。

「海洋文化館」を海洋文化の拠点に。

「研究の原点は鳩間島だった」と語る後藤先生に、海洋文化館の展示資料について、海洋民の生活文化についてお話を伺いました。

Fe-nu-kaji Interview
南ぬ風インタビュー vol.4

南山大学人文学部
人類文化学科教授
後藤　明
Akira Goto

カヌーの模型を手にカヌーの素晴らしさを語る後藤先生（後藤研究室）

「世界の民族の大部分は文字を持っていなかった」

——まずは、ご専門の文化人類学ですが、どのような学問なのでしょうか。

後藤　人類学ですから、当然、人間を研究する学問になります。もう一つは、いわゆる文化・文明ですね。古代文明や近代文明だけでなくて、文字を持っていない世界、実はエジプトやインド、中国には古くから文字がありましたが、文字を持っている民族の方が珍しくて、世界の民族の大部分は文字を持っていなかったわけです。そういう民族の文化、歴史といっても文字で書かれたものがないわけですから、伝承とか考古学の資料とか、昔から使われている道具とか、そういうもので、その人たちの文化の系統、起源、歴史などを研究するのが文化人類学の特徴だと思います。

しかも、文書がないわけですから机上の学問では無理で、実際に現地に行ってフィールドワークをして、できれば現地の人たちと一緒に生活をして、その人たちの技や言い伝え、価値観、そういうものを直接自分で見て聞いて体験して、その人たちの文化を明らかにするという、分かりやすく言えばそういうことになります。

——東南アジア、オセアニア文化がご専門ですが、それらの地域については、どのように感じていらっしゃいますか。

後藤　私は当初から海に生きる人たちに興味がありまして、東南アジアでも島嶼部、フィリピン、インドネシア、いわゆるオセアニアの島々ですね。もちろん、その繋がりで日本の沖縄や奄美、最近だと小笠原や八丈島にも興味を持っています。

きっかけは大学一年生のときに行った沖縄の鳩間島でした。復帰二年目の頃で、鳩間島で廃屋を借りて、二年続けて一ヶ月ぐらい自炊して暮らしたことがあります。大学の探検部というか、ほとんど遊びのようなもので

[ごとう　あきら] 1954年宮城県生まれ。東京大学文学部考古学科卒。ハワイ大学人類学部大学院博士課程修了。専攻は物質文化や言語文化の人類学的研究。宮城学院女子大学助教授、教授、同志社女子大学教授を経て、2007年南山大学人文学部人類文化学科教授に就任。現在、カヌー文化ルネッサンス活動に携わる。著書に『海の文化史ーソロモン諸島のラグーン世界』（未来社）、『ハワイ・南太平洋の神話』（中公新書）（中央公論新社）、『海を渡ったモンゴロイドー太平洋と日本への道』（講談社）などのほか、訳書、編著、論文など多数がある。

す。ある時、野菜がなくなって村のおばさんに聞くと、「パパイヤを煮て食べなさい」と言われて驚いたことがあります。それから一度だけ拝所の落成式の儀式みたいなことがありまして、その時にいつも物を買っている店のおばさんが、いわゆる拝み、ノロ系の人で、普段と違う顔が見えたりして、沖縄の信仰が本土と大分違うのに驚いて、こういうことを研究したら面白いかもしれないと思ったんです。その頃は、考古学とか文化人類学の区別はあまりハッキリしていませんでしたが、研究するんだったら南方海域が自分に向いているんじゃないかと。そういうことで、海洋博公園の仕事をさせていただくようになって原点に戻ったような感じで、運命というと言い過ぎかもしれませんが、そんな思いがしています。

「海洋文化館の展示資料のすべてを調査」

——海洋博公園との関わりはどのようなことからだったのですか。

後藤　十何年か前に仙台の大学にいたときに、単なる観光客で海洋博公園に遊びに行って、海洋文化館を見学して衝撃を受けました。普通、博物館というのは、オセアニアとか東南アジアとか地域ごとに展示をしますが、海洋文化館というのは地域をとっぱらって、一貫して"海の流れ"というテーマで資料を展示していましたからね。その時はそれで終わりましたが、国営沖縄記念公園事務所からの依頼で、二〇〇三年の冬でしたか、四、五日かけて海洋文化館の資料を改めて見させていただきましたが、やはりカヌーを中心に大変すばらしい資料が揃っていました。オセアニアの資料はヨーロッパ、ニュージーランド、ハワイの博物館にもありますが、カヌーはそこと比べても何ら遜色がありません。しかも、それらの博物館が持っていないような有名なカヌーも二、三隻ありまして、学術的にも素晴らしいということが判りました。

二〇〇七年には、うちの学生を使って海洋文化館の資料千二百～千三百件の全編調査を行いました。

オセアニアに関する様々な資料が収められている南山大学人類学博物館

「カヌーは過去のものではなく、新たな関係を築くシンボル」

——学術的に素晴らしいということですが、それはどのような点ですか。

後藤　沖縄国際海洋博覧会は一九七五年。資料が集められたのはその少し前で、それらが作られたのはおそらく六〇年代、今から五十年くらい前になります。五十年で日本も随分変わりましたが、世界もものすごく変わって、オセアニアの島々の人々だってインターネットや人工衛星を理解していますからね。我々と同じ認識を持って生きているわけですが、五十年の間に急激に失われていったものがあります。

航海用のカヌーが急激に消滅していきました。エンジンが入ってきて、帆を使って移動するのは大変ということで、ポリネシアにはほとんど無いし、メラネシアにもない、ミクロネシアに一部あるくらいです。五十年の間に失われたものがたくさんあって、現地にも残っていないものが、実は海洋文化館に残っているんです。

一つはニューギニアの航海用のカヌーで、文化人類学的にも大変有名なクラ・カヌーです。現地のパプアニューギニアの博物館には下の部分はあるんですが、帆をかけたままで保存されているのは、私が知る限り海洋文化館にあるものだけです。それから、タヒチのカヌーですが、ダブルカヌーといって船体を二本並べたものがあります。今から二百年くらい前にイギリスのクック船長という人が記録したカヌーですが、今から四十年くらい前に、映画の撮影のために文化人類学者も協力して復元されました。そのときに造られたカヌーが海洋文化館に展示されています。現地の人が現地の材料を使って精巧に復元したもので、技術の継承という点でも極めて重要なものです。

去年、財団から委託を受けてそのダブルカヌーを造ったタヒチに調査に行きました。四十年前の船大工さんはほとんど亡くなっていましたが、息子さんや、当時、子どもだった人たちがいて、写真を見せると確かにここで造ったもので、当時、大工さんたちが毎日毎晩遅くまで頑張っていたと。素材もパンの木の芯の良い部分を使っていて本当に素晴らしいものだと判りました。二百年前に無くなったものを精巧に復元したなんて世界にもあまり類がないんです。海洋文化館には、他にも消滅が危ぶまれているオセアニアのカヌーが残されていまして、日本だけじゃなく世界にとっても大切な資料になっています。

今回の調査の目的は、主にカヌーの修復技術を確かめることでしたが、カヌーを通じて現地の方々ともう一度交流が図れないだろうか、ということもありました。カヌーを修復したり、新しいものを造ったり、カヌー体験などで沖縄とタヒチ、沖縄とニューギニアの交流が図れないだろうかと。カヌーは過去のものではなく、未来に向けて新たな関係を築くシンボルになると思ったわけです。カヌーのような資料をベースにいろんな交流イベントを計画して、海洋文化館が海洋文化の拠点のような位置付けになれば、海洋博公園にとっても良いことだと思います。

「海が天になって、天が海になる」

——海洋文化館にはプラネタリウムもありますね。

後藤　ポリネシアの人々というのは、実は西洋人が大航海時代に世界中に進出する以前に、北半球から南半球まで広まっていった民族なんです。ポリネシアの北はハワイ、南はニュージーランド、東はイースター島なんですが、石器時代の段階で、沖縄まで含めて広大な太平洋に広がっていった海洋民族の最も発達した文化なのです。

当然、彼らは星を頼りに航海をしていたはずです。北極星や南十字星の位置などで方角を決めたり、移動のスピードなんかも星座の変化で確かめたり、星だけでなく海流とか鳥とかの知識も持っていたはずですが、普通の感覚では理解できないような距離まで移動しています。それは奇跡に近い。そういう人たちの物語をプラネタリウムで体験してもらえたらという意図があります。

ポリネシアには、マウイという神様が釣りをしていて、海底でひっかかったものを引き上げたら島になって浮上してきたという"島釣り神話"があります。島を釣り上げるというのは海から島が浮上してくるイメージなんです。それから、水平線というのは空と海がくっついて、昔、英雄がそれを手で持ち上げたという神話もあります。水平線まで行って空を押し上げて、さらに彼方まで進んで行ったという。ですから、空に星が出てくることと新しい島を発見することは観念的には並行になるんですね。天と海が一つというのかな、海が天になって、天が海になる。「天駆ける」という言葉がありますが、あれは天でもあるし海でもあるわけです。ですから、星座にもサメとかイルカとか海洋動物を見るわけです。神話の中には火星とか流れ星もあります。まさに宇宙旅行なんです。海と空、その分け目まで行くカヌーというのは、海にも行くし天にも行く、そういうイメージで本当にスケールの大きな宇宙観だと思います。

「いろんな体験学習ができるのが海洋博公園の強み」

——最後に、今後の海洋博公園に期待することなどありましたらお聞かせください。

後藤　海洋博公園には水族館があって植物園があって郷土村がある。海洋文化館にはサメの歯で作った漁具があります。そして、沖縄美ら海水族館に行けばサメのコーナーがあって、いろんな種類の歯があります。例えば、子どもにクイズを出して、海洋文化館のサメの歯はどんなサメか水族館に行って調べて来なさいとか。海洋文化館にある資料の八〇％は植物素材ですから、それを植物園で探してみるとか。水族館、海洋文化館、植物園を連動させて、クイズを楽しみながら自然と文化が学習できるようなところになればと思います。さらに海の体験もできますし、郷土村で沖縄やオセアニア文化に関する企画もできます。いろんな体験学習ができるのが海洋博公園の一番の強みだと思います。

それと、最近は国際交流ということを言いますが、沖縄の場合は一味違ったものができるのではないかと思います。沖縄の人たちは世界にたくさん出ていて、いろんな文化を持っているという特徴があるわけで、特に文化人類学というのは一般の人々の生活を研究する学問ですから、そういう生活のレベルに基づいた交流といいますか、自然と生活に密着したような草の根の交流というんですか、それができる場だと思っています。そのためには体験学習にしても交流にしても、それらをサポートするスタッフの育成ということも大事ではないかと思います。

（平成二十一年一月二十日、南山大学にて）

上）ニューギニアのクラ・カヌー
（海洋文化館所蔵）
下）タヒチのダブルカヌー
（海洋文化館所蔵）

沖縄の色・形

伝統が育んだしなやかさと繊細さ

宮古上布

宮古上布は越後、能登、近江に並ぶ日本四大上布の一つとして古くから知られている。絣が細かく布面を蝋引きしたような光沢があるのが特徴で、他の上布には見られない独特の風合いと美しさがある。そこには独自の技法と職人たちの根気が織り込まれている。

取材協力:宮古織物事業協同組合

一日頑張っても一ヨミ

宮古上布の糸の原料はイラクサ科の苧麻（ちょま）という植物である。中でも、"ウリズンブー"と呼ばれる初夏の苧麻の繊維が最もよいといわれている。細くて張力に富み強くてしなやかだという。宮古織物事業共同組合で後輩の指導をしている伝統工芸士の友利ヒデさん（八五）は、「戦後しばらくはヤギ小屋の堆肥で育てていたが、今は鶏糞を使っている。繊維が悪くなるので化学肥料は絶対に使いませんよ」と話す。苧麻は三五日～四〇日間隔で年七回～八回刈り取るという。

上布の糸はこの苧麻の茎から採る。苧麻の茎を根本の方から刈り取り、葉を落として表皮を剥ぐ。剥ぎ取った表皮の裏側にアワビの貝殻を当てて繊維以外の部分をそぎ落として繊維だけを採る。採った繊維は乾燥保存する。この苧麻の繊維を水に浸してやわらかくし、爪先で細かく裂き結び目を作らずに撚り合わせて継いでいく。この作業は「ブー績み（ブーンミ）」と呼ばれ根気のいる仕事である。宮古民謡には「蛍よ蛍、塩を一升くれるから（中略）ブーを績め、ブー績め」という歌があり、単調な爪先の仕事をしながら謡われていたという。

上布はこの細い糸が生命（いのち）である。それだけに「ブー績み」の作業は慎重に行われる。「糸の太さをそろえ、糸のつなぎ目が抜けないように角度は一定に保つことがポイントである。あの蝋引きしたような艶としなやかさが一段と増すのである。

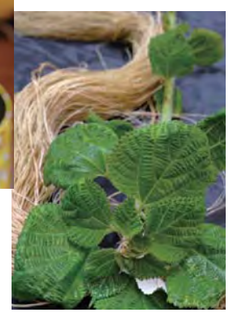
宮古上布は"トンボの羽根"と形容されるのだが、それを産地では「洗濯」と呼んでいる。織りあがった布は湯で洗って織る時につけたノリや脂を落とし、サツマイモのでんぷんノリでノリづけする。その時のノリの調合は経験と勘に頼るという。

さらに、半乾きにした状態で長さと布幅を整えアカギの台の上に乗せて、重さ四キロほどの木槌で布面をまんべんなく打っていく。砧打ちと呼ばれるもので、木槌でリズミカルに垂直に打っていく。布を傷めないように角度は一定に保つことがポイントである。あの蝋引きしたような艶としなやかさが一段と増すのである。

宮古上布は"トンボの羽根"と形容されるほどに薄く、風通しがよい。高温多湿の気候にぴったりの着物である。まさに伝統の技が育んできた一品である。宮古上布については、宮古歌謡「あやぐにー」で次のように謡われている。

布の美しさは　緯糸から
布地の美しさは　織手から
紺の美しさは　藍染めの手から
絣の整いは　勢奴（しど）から

「絣の整いは勢奴から」は"絣の織りの美しさは織子による"の意。この歌謡に宮古上布の真髄がみごとに表現されている。



左）貝殻を使って繊維以外の部分をそぎ落としていく
下）苧麻（ちょま）と苧麻の繊維

さらに節のない上質のものが選ばれて絣糸になる。

宮古織物事業協同組合・専務理事の島袋朝子さんは、「細い絣糸が宮古上布の特徴で伝統なんです。苧麻糸は乾燥すると糸が切れて織れないので湿度には気を使います。ですから夏場でもクーラーは使いませんよ」と話す。

宮古上布は"トンボの羽根"

「宮古上布は二度織る」といわれている。それは白い絣柄をつくるときと、布を織るときに織り機を使うからである。絣の模様は方眼紙に書かれた図案に従い、糸をそろえ、ノリをつけて絣括りをするのだが、宮古上布の場合には絣締（かすりじめ）という織り機に木綿の経糸を掛け、そこに絣の緯糸（よこいと）を入れて上下の糸でかたく締め付ける。それは木綿糸と絣糸で織った筵（むしろ）に似ていることから絣筵（かすりむしろ）と呼ばれている。その絣筵を藍で染めると、木綿糸で締め付けられた部分が染め残り絣柄になるのである。

藍染めの作業所に入ると、スルメの干物のような臭いが漂ってくる。それは藍が発酵している匂いで藍が生きている証拠でもある。「藍染めは十三回～十五回くらい繰り返しますが、ほとんど黒に近くなるほど染めますね」と島袋さん。

そうして染めた絣筵を干したあと解きほぐして一本ずつの絣糸にしていく。これを絣解（かすりと）きというが、その絣糸は経と緯に使われる。その後、経糸と緯糸を織り機で織りこんでいくが、布が一〇センチから一五センチほどになると、一端織りを止め絣合わせを行う。縫物針で経糸を上げたり下げたりしながら絣模様が十字になるように調整していくのだ。「宮古上布は絣が細かいので丁寧に慎重に織っていきます。糸の毛羽を防ぐために経糸にノリづけをし、すべりを良くするために脂をつけて織っていきます。一反を織り上げるのに熟練した人でも四ヶ月以上かかります」と島袋さん。

そうして織った布をさらに調整加工するのだが、それを産地では「洗濯」と呼んでいる。織りあがった布は湯で洗って織る時につけたノリや脂を落とし、サツマイモのでんぷんノリでノリづけする。その時のノリの調合は経験と勘に頼るという。

さらに、半乾きにした状態で長さと布幅を整えアカギの台の上に乗せて、重さ四キロほどの木槌で布面をまんべんなく打っていく。砧打ちと呼ばれるもので、木槌でリズミカルに垂直に打っていく。布を傷めないように角度は一定に保つことがポイントである。あの蝋引きしたような艶としなやかさが一段と増すのである。

宮古上布は"トンボの羽根"と形容されている。

キルトのような絣筵（かすりむしろ）

宮古上布は根気のいる仕事と語る宮古織物事業協同組合・専務理事の島袋朝子さん

右上）4、5歳の頃から宮古上布を見て育ったという友利ヒデさん
左上）糸車（ヤマ）で糸に撚りをかける
右下）砧打ちは3時間ぐらいかけるという
左下）絣合わせをしながら丁寧に織り込んでいく

沖縄の自然
Nature of Okinawa

南の島の植物と動物たち

和名：リュウキュウマツ
科名：マツ科
学名：Pinaceae *Pinus luchuensis* Mayr

シリーズ 沖縄の大木④

リュウキュウマツ

リュウキュウマツは琉球列島固有の常緑高木で、その壮大な樹形、流麗な枝振りと濃緑色の葉は世界中のあらゆる松のなかでも際立っている。その姿は古くから沖縄の人々の心情に強く訴えるものがあり、多くの琉歌が残されている。常緑の葉はとこしえの美しさと讃えられ、2対の葉は円満な夫婦の姿に例えられている。沖縄の自然、気候風土を象徴する植物といっても過言ではなく、昭和47年には沖縄県の県木に指定されている。

利用は街路樹、風致樹の他、硬く重い材質は建築用材として優れており、15世紀の尚真王時代から航海に必要な船の帆柱を得るため、マツの植林が積極的に推進されるなど重要視されていた。その後、18世紀には蔡温の施策により用材、防風防潮のため植林され、現在でも今帰仁村、名護市など各地にその姿を見ることができる。

名護市田井等部落の西後方にある小高い拝所広場の縁にあるリュウキュウマツは樹高16m、幹周3.8m、胸高直径120cmの威容を誇っている。名護市教育委員会発刊の「名護市の名木」によれば推定樹齢200年とされている。かつてはこの場所に5本の巨木があったが、内3本はマツノザイセンチュウ等により枯死し、いまではこの樹と西側の樹高13mのマツ2本を残すのみである。

リュウキュウマツのある拝所広場とそこに至る階段は常に掃き清められており、地域の人々の深い愛着を感じさせる。

和名：オキナワテンナンショウ
科名：サトイモ科
学名：*Arisaema heterocephalum* Koidz. subsp. *okinawense* Ohashi et J.Murata
レッドデータカテゴリー：
絶滅危惧ⅠA類（沖縄県）、絶滅危惧ⅠA類（環境省）

シリーズ 沖縄の希少動植物④

植物

サトイモ科の沖縄固有種
オキナワテンナンショウ

本種は石灰岩質の林床に生育する多年草植物で、沖縄島の固有種です。

草丈は約70cmで、楕円形の小葉が鳥足状につきます。雌雄異株で、雄株では花柄が長いため花序が葉より高くつくのに対し、雌株では花柄が短く、葉より低くつきます。小花が密集した花序を包み込んでいる苞（ほう）（仏炎苞）の内面が濃紫色を呈しているのが特徴です。

もともと自生地が限られていたのに加え、近年では園芸用の採集などによって、個体数が減少しています。

動物

敏捷で派手な色をしたハゼ
タメトモハゼ

日本では、種子島以南に分布します。河岸の植物の茂みの下で、中層に静止しているところがよく観察されます。警戒心が強く、なかなか近くに寄ることはできません。全長20cmを超える大型のハゼの仲間で、赤・青・黄の斑紋があり、沖縄の淡水魚の中では派手な体色をしています。昆虫や甲殻類、魚類を食べています。一生の間に海と川を行き来する両側回遊型の生活を送るといわれています。その為、海と川両方の環境が整っていないと生きていけません。

和名：タメトモハゼ
科名：カワアナゴ科
学名：*Ophieleotris* sp.
レッドデータカテゴリー：
絶滅危惧ⅠB類（沖縄県）、
絶滅危惧ⅠB類（環境省）

蟹の恩返し

あるところに夫婦と娘の三人暮らしの家があった。一家は貧しく、浜辺の粗末な小屋に住んでいた。父親は畑もないので、一里ぐらい離れた所の金持人の家に通って、畑の草取りなどをして、少しのお金をもらって暮らしていた。ある日の朝、父親がその金持ちの家に働きに行く途中、近くの草むらで何か変な物音がしたので見てみると、蛇が立って身を輝かして、もう少しで龍になろうとしていた。父親は、「とんでもないものを見てしまった。知らないふりをしておこう。」と思いその場をそっと離れようとした。ところが、人間に気づいた蛇は「待て。俺が龍になろうとしているのをおまえが見たために完全な龍にはなれなかった。おまえをそのまま帰すわけにはいかない。俺はおまえを食べなければいかん。」と言った。すると父親は、「餌食になるのもいいが、私はまだ仕事を残してきている。また家には妻と子供が待っている。私が急にいなくなったら大変だから、来月の十日には必ず餌食になるので、それまでは待ってくれ。」と、その蛇にお願いして、その日は逃がれて帰って来た。でも、父親は先々のことが心配で夕飯の時になってもご飯を食べようとはしなかった。不審に思った家族が父親に問いただすとようやく話し出した。

今日の朝あったことを詳しく家族に話しをして「来月の十日にわしは餌食にならなければいけない。」と言ったら、娘が、「お父さん、私が代わりに餌食になります。」と言った。父親は、「娘のお前を犠牲にはできない。親である私が餌食になるほうがいい。」と言ったが、娘は「お父さんは大事な働き手です。餌食ならば私のような者でも十分役に立つでしょう。」と答えたので娘に任せることにした。

その一家は海の近くにあるが、ふだんから蟹が沢山寄って来ていた。その娘は遊び友達もいないので、餌を与えたりして、いつもこの蟹たちと遊んでいた。夕方になったら蟹たちはみんな浜に帰るが、一匹の蟹だけは娘になついて、どうしても浜には帰らなかった。それで、しかたなく自分の家の水甕のそばに養っていた。そうして、そのうち餌食になるその日に、娘は、「ああどうしようか。何のいい知恵もない。私は今日で蛇の餌食になるから、もうあんたとも今日でお別れだね。」と、この蟹に話しかけた。

そして、娘は着物を整えて、家の中で座っていた。そこへ蛇がのそのそやって来て、そして、家に入った途端きれいな男の姿に変身した。娘が、「お父さんの代わりに私が餌食になりますから。」と言って、祈るようにして目を閉じてうつむいていたら、その蛇は、「おお、そうか、お前は父親の代わりか。お前の方が若いし、骨も肉も柔らかいはずだから上等だ。」と言って蛇は喜んだ。そして、大きな口を開けて、一呑みにしようとした時、そばに隠れていた蟹が蛇の目に鋏を刺した。蛇はびっくりして、「あいたたー。」と言って逃げようとしたら、その蟹が今度は両方の鋏で引っ張って外に引きずり出し、その蛇を退治した。

娘とその両親は、「ああ、何がどうなったのだろう。」と不思議に思いながらも、娘が助かったことを喜んだ。後になって蟹が蛇を退治したと分かって、それからは、娘はなお一層この蟹をかわいがってやったらしい。

資料提供／NPO法人沖縄伝承話資料センター

御庭（ウナー）案内

華麗な王朝文化の旅へと誘います

年間２００万人の観光客が訪れる首里城。その首里城の建物や展示品の案内を行っているのが首里城公園管理センターの「御庭案内」の皆さんです。案内の仕方でお客様の首里城や沖縄に対するイメージが変わってきますので、首里城公園の大切な業務になっています。

展示物の内容を説明する案内係の新垣さん

「御庭案内」の業務

首里城は沖縄のシンボル的な存在です。首里城については様々な出版物やインターネットなどで情報を得ることができますが、実際に首里城を前にして説明を受けることができれば理解も深まり、旅の良い思い出にもなります。

首里城で案内を行っているのは、首里城公園管理センター・管理課庶務係に所属している皆さんで、「御庭案内」と呼び、現在７名が案内係として活躍しています。案内係の事務所は改札口となっている奉神門の一角にあり、案内業務のほか車椅子の貸出や園内アナウンス、迷子の対応などの業務も行っています。

案内業務には一般のお客様・観光客を案内している「定時案内」があります。「定時案内」は毎日、10時、13時、15時の３回行っており、南殿・番所からスタートして書院・鎖之間、正殿、北殿の順に案内していきます。時間は１回につき40分～50分ということです。

「定時案内」は予約制ではなく先着順となっており、案内係は定時時間の前に集合場所になっている南殿・番所入口で待機します。鮮やかな朱の着物の上に白地に藍染紅型の羽織という出で立ちで、誰もがそれと分かるようになっています。元服前の男子の衣装をアレンジしたものだそうですが、古式ゆかしい琉球王国の雰囲気が伝わってきます。

案内係で中心的な役割を担っている新屋さん

南殿・番所の軒下で人数と時間を確認し、頃合を見計らって首里城の建物や琉球の歴史などの概略を10分くらいかけて説明します。人数は約８名程度を目安にしているといいます。

案内係の新屋さんによると、「それ以上になると声が通りにくくなります。そんな時はなるべく“私の近くでお聞きください”とお断りをして、案内しています」とのこと。団体の観光客と重なる場合などは大変だといいます。

集合場所の南殿・番所の軒下

基本は首里城に初めて訪れた人が聞いても分かること

「御庭案内」は、琉球王国の歴史や文化に関する知識のほか、身だしなみや着付け、話し方や接遇に関する知識も必要になります。そのため、新人には歴史・文化に関する勉強や話し方のトレーニング、最終的にはテストも実施しています。歴史や文化については首里城を調査している学芸員による講義のほか、指導係について一対一で学んでいるといいます。他にも展示物についての勉強、身だしなみや着付け、話し方や接遇についても講習会を受講して技術や知識を身に付けています。

新屋さんに「新人指導案」を見せてもらうと、そこには総括研修（１～４日）、概要説明（３週間）、展示パネルの勉強（半月～１ヶ月）、強化月間（１～２ヶ月）などのスケジュールがびっしりと書き込まれていました。「歴史に詳しい人かどうかは別で、とにかく現場でしっかり学んでもらうことにしています」と新屋さん。

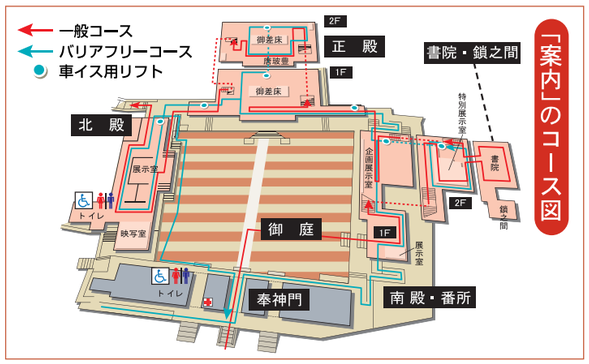
案内係によって違いが出ないように、基準を設けて統一性を図り、基本は首里城に初めて訪れた人が聞いてもよく分かること。半年で案内員として一人立ちできることを目指しています。

お客様のイメージが膨らむ案内

実際の案内の現場では、難しい質問や想定外の質問もあります。意外と難しいのが「沖縄の人は何人なの？」とか「なぜ首里城は赤いの？」というような素朴な質問。お客様からの質問には出来る限り答えられるようにしているといいますが、すぐに答えられないときは、案内が終わったあと案内所に帰って調べ、お客様の連絡先に知らせることもあるそうです。そのため、日頃から勉強は欠かせないといいます。また、建物が復元・公開されたり展示物の入れ替えなどがある場合は、その都度、知識の習得に努めているとのことです。

案内をしてやりがいやうれしさを感じるのは、リピーターのお客様に声をかけられるとき。「『また来たよ』と会いに来てくれたときはうれしいですね」と新屋さん。

新屋さんが目指している案内は、お客さまが場面や風景を想像できる、想像しながら案内が聞ける、そういう案内だと語っていました。



上から順に
鎖之間で庭園の説明
正殿で御差床を説明
北殿でお客様の質問に答える
案内終了後、お客様の要望で気軽に記念撮影に応じる

亜熱帯性動植物に関する調査研究・普及啓発事業

不格好な花序をもつ巨大コンニャク

コンニャク属は、サトイモ科の多年生塊茎植物で熱帯アジア、アフリカ、オーストラリアを中心に約170～200種が分布するといわれています。

現在、7種のコンニャク属をバックヤードで育成管理しており、アモルフォファルス・ランビー、アモルフォファルス・パエオニイフォリウスの2種は開花を確認しています。しかしながら、世界最大級の花序（高さ約3・5m）をもつアモルフォファルス・ティタヌムに関しては、まだ開花にいたっていません。2002年に小石川植物園より導入し、これまでに2003年、2008年に葉の生長記録をとり、2006年と2007年の植え替え時（それぞれ休眠時）には塊茎のサイズを計測しています。2007年11月時点での塊茎の重量は2、100gであり、アメリカで報告された開花時の塊茎の重量15kgには達しておらず、開花にはまだ数年必要と考えられます。また、2008年の調査により、ネコブセンチュウに感染してしまったこともわかり、その対策を行うとともに、葉を用いた栄養繁殖（挿し木）を試みています。

今後は、より健全な株に育成するための肥培管理、栄養繁殖による種苗増殖の方法について研究し、開花条件を整えていきたいと考えています。また、これらの手法により得られた技術は、サトイモ科等の多年生草本の栽培方法、育種などに利用できることから、近縁種の普及啓発につなげていきたいと考えています。

アモルフォファルス ランビーの開花状況
花序は地面からタケノコのように伸びる（高さ約85cm）

アモルフォファルス・ティタヌムの塊茎

沖縄における都市緑化植物としてのツバキの活用

ツバキは日本を代表する花木の一つで、日本では古い時代から華道や茶道、造園材料等に利用され親しまれてきました。ツバキ属は東南アジアの熱帯や暖温帯に約250種分布しており、日本にはユキツバキ、ヤブツバキ、サザンカ、ヒメサザンカの4種が自生しています。ここ沖縄には、ユキツバキを除く3種が分布しており、中でもヒメサザンカは「香りツバキ」の交配親として多くの園芸品種を生み出しています。ヤブツバキは比較的強健で土壌をあまり選ばないことから、県内外で防風林、庭園樹等として広く利用されています。

当財団では、沖縄の都市緑化材料として活用するためツバキ類の導入を進めています。導入にあたっては、沖縄の自然環境に適応し、花が美しく、花付きがいいなど優れた特性を持つ品種が求められます。そのため、沖縄における適応性や花の特徴、開花時期などの基礎調査も行なっています。また、ツバキの魅力や都市緑化資材としての活用方法を広く知っていただけるよう、沖縄椿協会との協働で、ツバキ展やツバキの植樹、苗木の生産等を実施しています。

ツバキ展開催状況

導入したツバキ類

イルカを飼育して分かった事

広い海に暮らすイルカの生態を調査することは難しく、未だ明らかにされていない事も数多くあります。

自然海では観察が難しいイルカの社会行動や繁殖行動については、水槽内で観察する事で多くの事が明らかになってきています。妊娠期間や授乳行動の他、仔イルカは、通常尾から生まれ、頭部から産まれるのはまれである事などが確認されています。また、遊泳速度などの運動能力解析や、イルカ達がどのような時にエコーロケーションを使うのかといった鳴音解析、認知能力などイルカの持つ様々な能力についても、イルカの飼育を通して科学的に検証を行っています。また、呼吸の間隔や体温、心拍数などの測定、血液や尿、便などの諸検査からは、イルカの生理値についての情報を得ることが出来ます。呼気の細菌群の調査や薬の血中動態調査の結果は、飼育鯨類の健康管理や治療にも役立っています。また、繁殖生態については継続的な卵巣のエコー診断や血中のホルモン測定等を行う事によって、性周期や性成熟の時期などが明らかになってきています。

このように、イルカを飼育し調査研究を行う事は、イルカの生理生態を解明することであり、漂着・迷入した個体の保護にもつながっています。

データロガー（小型記録計）を装着しての遊泳速度の計測

イルカの赤ちゃんは尾から先に生まれる（ミナミバンドウイルカ）

ウミガメから学ぶ環境学習

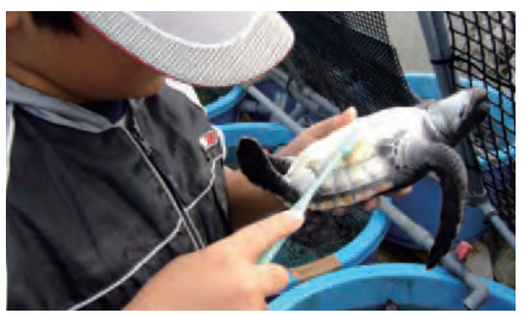
海洋博公園のある本部町周辺には、ウミガメが産卵に訪れる砂浜がいくつかあります。地元に生息する野生生物を知り、その生息環境の保全に関心を持ってもらうことを目的に、町内にある瀬底小学校の4年生、崎本部小学校全生徒を対象に「ウミガメから学ぶ環境学習」を実施しました。

事前学習として、ウミガメの産卵や孵化についてパネル等を使っての学習会や、ウミガメの一生をテーマとしたゲームを通し、人間の社会活動によって引き起こされる環境悪化がウミガメにどのような影響を与えるのかなど、より具体的に知ることが出来たようです。

また、予備水槽で飼育している孵化1年未満の仔ガメの形態を観察したり、海藻が付着した甲羅を磨く作業や給餌などの飼育実習を体験しました。瀬底小学校の生徒は、仔ガメの成長記録（甲長、甲幅、体重）や、季節ごとの摂餌量の変化についてまとめるなど、仔ガメを間近で観察したり飼育体験を行うことで、よりウミガメへの関心を深めることが出来たようです。

引き続き海洋博公園の自然環境と園内施設等を活用した海生生物に関する環境学習を実施し、沖縄の海の環境保全に積極的に取り組みたいと思います。

仔ガメの体重を計測して成長の様子を観察します


体についた海藻をきれいに取り除くことも大切な健康管理のひとつです

「サンゴの海」が出来るまで

沖縄美ら海水族館で最初に目にする水槽が「サンゴの海」です。たくさんのサンゴの間を泳ぐ色とりどりの魚たち。水槽上部から差し込む自然光に映えた白い砂。思わず、「きれい！」と声があがる見応えのある水槽です。

平成14年の沖縄美ら海水族館の開館に向けたプロジェクトの一つが、「沖縄のサンゴ礁を再現する」でした。これまで小規模な水槽でサンゴの飼育展示に取り組んできましたが、サンゴは少しの水質の変化で弱ってしまう、とても飼育の難しいものでした。ですから、水深3メートルの大規模水槽でのサンゴの展示は、かなりの困難が想定されました。とりあえずサンゴの飼育実験を開始し、沖縄を代表するサンゴ「ミドリイシの仲間」の飼育に挑戦しました。この飼育実験を通して、サンゴの飼育に最適な光質、水流の工夫、水を送るポンプの材質など、様々な飼育に関するノウハウが分かってきました。なかでも、サンゴの成長を妨げる海藻やイソギンチャクを効率よく食べてくれる魚種も実験によって突き止められました。これらの実験の結果を反映させ、「サンゴの海」の展示が実現したのです。ここでサンゴ達はすくすくと成長し、毎年6月には放卵放精も行います。これらの卵が幼生となり、また自然に還ってくれるように、サンゴに関する実験、調査はまだまだ継続して行っていきます。

「サンゴの海」

ハブクラゲの被害防止について

ハブクラゲは、沖縄以南に生息する猛毒を持つ傘の直径が10cm程度のクラゲで、沖縄県では、毎年6月から9月にかけて海水浴、マリンレジャー等で海を利用する人へ刺傷被害をもたらしています。

海洋博公園のエメラルドビーチでは、ハブクラゲ侵入防止ネットの設置と、ハブクラゲ出現情報の案内により被害発生を抑える措置を講ずるとともに、刺傷事故等への対応として、ビーチ救護室に看護師を常時配置しています。

ハブクラゲの被害をなくし、皆が快適に海を利用できるようにすることを目的に、沖縄本島における出現情報調査を行う一方、沖縄美ら海水族館においては夏季限定ではありますがハブクラゲの展示と解説により危険生物であることの周知を図っています。

しかし、ハブクラゲの生態はまだ解明されていないため、行動及び分布や発生場所について継続調査を行うとともに、飼育下における生態の解明により、被害対策に貢献できるよう努めて行きます。

ハブクラゲ

エメラルドビーチのハブクラゲ侵入防止ネット

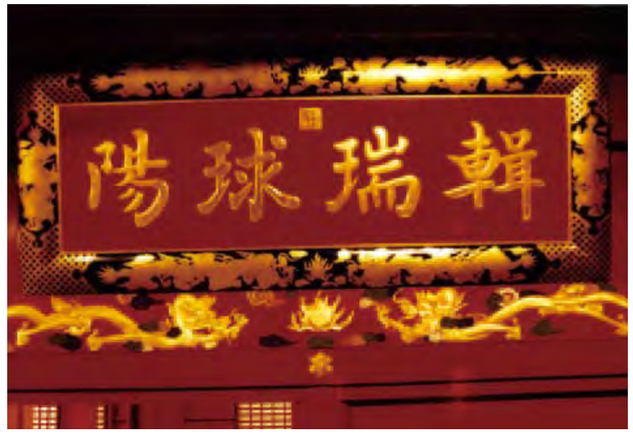
首里城に関する調査研究・普及啓発事業
往時の漆の塗り技法を再現！皇帝御書扁額『輯瑞球陽』、『永祚瀛壖』の制作

当財団は、首里城公園が開園して10年目の2002年に、首里城正殿二階（大庫理）にあった中国皇帝の直筆の書を扁額にした『輯瑞球陽』、『永祚瀛壖』の二枚の扁額を復元しました。清朝の歴代皇帝は、即位の時や、皇帝の古希のお祝いの時などに自ら認めた書を琉球に贈っていたのです。琉球王国では、皇帝から書を贈られるごとに木製の扁額に写し取り、漆を塗って正殿の二階に掛けました。かつて、琉球王国末期の正殿二階には、皇帝御書扁額が9枚あったといわれています。そのため、正殿二階は大庫理だけでなく、御書楼という呼ばれ方もしていました。復元された首里城正殿は18世紀にあった建造物をモデルとしており、1995年に制作した皇帝御書扁額『中山世土』を含めて、今回紹介する『輯瑞球陽』、『永祚瀛壖』の3枚の扁額が掛かっていたことがわかっています。正殿二階の雰囲気をさらに、その当時に近づけるために、当財団はこの2枚の扁額の制作に取り組みました。

『輯瑞球陽』は清朝第5代の雍正帝、『永祚瀛壖』は第6代の乾隆帝の直筆の書を扁額にしたものです。雍正帝は『中山世土』を書いた康熙帝の子で、乾隆帝は孫にあたります。この3人の皇帝の時代が清朝（1644～1912）で最も安定した時代でした。また雍正帝も乾隆帝も政治家としてだけでなく、文化人としても優れており、書も上手な皇帝でした。

この扁額の制作には、前回の『中山世土』と同じく、中国第一歴史档案館の協力を得て、北京故宮博物院内の未公開エリアを含めて、皇帝御書の扁額の調査をさせてもらいました。また当時の档案（公文書）に書かれた皇帝の書の情報の中から雍正帝・乾隆帝が書いた『輯瑞球陽』『永祚瀛壖』の八文字や皇帝が扁額に押す印影を提供してもらい、これを沖縄で分析して基本図を作り、県内在住の書家に扁額と同じ大きさに書いてもらいました。この書を県内在住の仏像などを彫る彫刻家と検討・調整を加えながら扁額に彫りこみました。漆塗りは、貝摺奉行所文書という王府の漆器関係の役所の記録を解読・分析して県内の漆芸家と琉球王国時代の漆の塗り技法を何度も実験を行い、扁額の制作に反映させました。

この時の塗り技法の実験を行った漆芸家たちが、現在行われている正殿壁面の漆塗装の塗り替え検討工事の担い手になっています。当財団が取り組んだ事業が正殿二階の展示の充実にもつながり、開園から十数年たった正殿の塗り替えにも役立っているのです。



雍正帝御書扁額『輯瑞球陽』
書の意味：琉球が幸せであることを祈っている
縦 147.0㎝×横 375.8㎝

乾隆帝御書扁額『永祚瀛壖』
書の意味：海の向こうにある琉球を幸いに治めよ
縦 147.0㎝×横 375.8㎝

海洋博公園

海洋博公園 4月～6月イベント

さわやかなうりずんの季節、緑あふれる海洋博公園を満喫！

短い南国の冬を終え、色鮮やかに咲く花々と共に、うりずんの季節がやって来ました。

海洋博公園では、熱帯の花を代表する「ハイビスカス展」や「サンダンカまつり」、大好評の「春休みイルカ学習会」、無料で楽しめる植物クラフト作りなどイベントが盛りだくさん！

3月よりエメラルドビーチもオープンし、本格的な夏を前に、清々しい風が吹き抜ける緑豊かな海洋博公園へぜひお越し下さい。

《無料入館日情報》 4/26（日）、5/4（祝）・5（祝） 沖縄美ら海水族館 小・中学生無料入館 ※高校生以上の入館は有料です。
4/26（日）、5/4（祝）・5（祝） 熱帯ドリームセンター・海洋文化館 無料入館 ※5/5（祝）は小・中学生のみ無料です。

生き物とふれあう

海の危険生物展

多種多様な生き物たちが生息する沖縄の海には、人に危害を加える生物も少なくありません。海へ出かける機会が増えるこれからの時期に役立つ、海の危険生物に関する情報を紹介します。

●4月29日（水）～5月6日（水）
●お問い合せ／魚類課（TEL0980-48-2742）

場所	水族館4F イベントホール	無料

キリンミノ

サンゴの卵と幼生観察会

生きたサンゴの卵と幼生（プラヌラ）を公開。また、サンゴの一生や生物としての特徴を紹介します。サンゴ幼生と、パネル・標本、卵の拡大画像を顕微鏡とモニタを使って展示します。

●6月のサンゴ産卵が確認された後の10日間を予定
●お問い合せ／魚類課（TEL0980-48-2742）

場所	水族館「サンゴの海」水槽前	入館料のみ

※サンゴの産卵状況によっては中止する場合もあります。

サンゴの産卵

春休み イルカ学習会

イルカやクジラについて楽しく学習します。参加者には素敵なプレゼントがあります。

※16:30～17:00
※定員 無し
※参加条件 無し

●3月28日（土）～4月5日（日）
●お問い合せ／海獣課（TEL0980-48-2748）

場所	イルカラグーン	無料

イルカラグーンバックヤードツアー

イルカたちの飼育管理のノウハウや健康管理、トレーニングの方法など、イルカショーの舞台裏をご案内します。

※17:00～17:30
※定員 20名
※参加条件 16:30～17:00（定員になり次第終了）

●5月2日（土）～5月6日（水）
●お問い合せ／海獣課（TEL0980-48-2748）

場所	イルカラグーン	無料

花と緑とふれあう

ハイビスカス展

ハイビスカスの原種、園芸品種約200種400鉢を紹介します。

●4月29日（水）～5月10日（日）
●お問い合せ／植物課（TEL0980-48-3624）

場所	熱帯ドリームセンター	入館料のみ

ハス乗り体験会

南米原産の巨大なハスに乗って池に浮かぶ不思議な体験。記念写真の特典があります。

※定員 無し
※参加条件 体重20kg未満のこども
※レプリカには20kg以上の大人も乗れます。
※申込方法：当日申込

●4月29日（水）、5月2日（土）～6日（水）
●お問い合せ／植物課（TEL0980-48-3624）

場所	熱帯ドリームセンター	入館料のみ

サンダンカまつり

沖縄の三大名花であるサンダンカの原種及び園芸品種約500鉢を紹介します。

●6月6日（土）～6月28日（日）
●お問い合せ／植物課（TEL0980-48-3624）

場所	熱帯ドリームセンター	入館料のみ

植物園ガイド

都市緑化植物園内を散策しながら、咲いている花や見どころを紹介します。

●随時開催
●お問い合せ／熱帯・亜熱帯都市緑化植物園（TEL0980-48-3782）

場所	熱帯・亜熱帯都市緑化植物園	無料

植物のクラフト作り

植物を素材にクラフトを作ってみませんか？楽しく葉っぱや木の実で遊んでみませんか？

※団体（10名以上）でご利用の場合は、事前連絡。

●毎日開催
●お問い合せ／熱帯・亜熱帯都市緑化植物園（TEL0980-48-3782）

場所	熱帯・亜熱帯都市緑化植物園	無料

※イベント実施内容は変更になる場合がございます。最新情報や詳細は公園ＨＰ等でご確認、またはお気軽にお問合せください。

首里城公園

首里城公園 4月～6月イベント

若夏の風を感じて 琉球の文化に触れてみよう！

新緑の季節となりました。首里城公園の龍潭では、アヒルの仲間たちが仲良く散歩し、城郭内では、ハイビスカスの花が咲き、メジロやイソヒヨドリが飛び交っています。

首里城公園では、みなさまにご満足いただけるよう下記のサービスも行っております。初夏の風に吹かれながら、ゆっくりと首里城公園を散策してみませんか。

平成21年度 首里城公園「舞への誘い」

華やかな衣装の「四つ竹」・優美な舞の「かせかけ」など、琉球舞踊の魅力を存分に堪能できるイベントです。

●実施日：毎週4日（水・金・土・日）と祝祭日
1回目 11時～11時40分 2回目 14時～14時40分 3回目 16時～16時40分
荒天時には、中止になる場合があります。
●場 所：首里城公園無料区域内下之御庭（系図座・用物座）

「舞への誘い」実施風景

鎖之間のご案内

鎖之間は琉球王朝時代、王子の控所であり諸役の者たちを招き懇談する施設といわれておりました。現在、鎖之間では琉球王朝時代の伝統菓子やお茶を味わう事ができる有料体験施設となっております。どうぞ往時の雰囲気をお楽しみ下さい。

●実施日：毎日9:30～18:00（ラストオーダー 17:30）
※平成21年7月1日（水）、2日（木）の休館日を除く。
●料 金：お一人様 300円
呈茶サービス料金
●場 所：首里城公園鎖之間
（有料区域内）

年間パスポートのご案内

【まだ年間パスポートをお持ちでないお客様へ】

首里城公園では、年間パスポートを販売しております。年間パスポートは、通常の2回分の料金で1年間何度でもご入館いただける大変お得な制度です。手続はとても簡単です。備え付けの申込み用紙に必要事項をご記入いただき、代金を添えて券売所窓口へお申し出下さい。わずか5分少々で年間パスポートを発行致します。どうぞこの機会に作成してみてはいかがでしょうか？

パスポート作成・更新料

大人：￥1,600 高校生：￥1,200 小・中学生：￥600

パスポート更新特典

●特典１：首里城公園直営売店のオリジナル商品がパスポート提示だけで10％割引！
（この場合クレジットカードはご利用頂けません）
●特典2：抽選で1万円分の商品券を進呈！

首里城公園友の会のご案内

【首里城公園友の会設立の趣旨】

首里城公園友の会は、首里城公園の質的充実と愛護、育成の諸事業を実施し、併せて会員相互の親睦を図ることを目的として設立されました。

【主な事業】

・首里城公園を支援する事業
・首里城公園に関する鑑賞会、講演会、研究会の開催
・首里城公園友の会 会報の発行
・史跡巡見、首里城周辺巡り、首里城見学会等の開催
・イヌマキ育樹祭
・会員相互の親睦
・その他、会の目的を達成するための事業

【入会方法】

本会の趣旨に賛同する会員を募集しています。（どなたでもご入会できます）
詳しくは事務局までお問い合わせ下さい。

■年会費

個人会員 二,〇〇〇円
法人会員 一〇,〇〇〇円

■会員の特典

1. 首里城公園への優待券入場（無料入館券2枚・会員証提示にて団体割引）
2. 友の会主催の講演会・見学会・史跡巡見等への参加
3. 友の会「会報」等の配布
4. 首里城公園友の会発行図書の割引

【問い合わせ先】

首里城公園管理センター内
首里城公園友の会事務局
TEL:098-886-2020

ふしぎがいっぱい 公園点描

海洋博公園

おもろ植物園

「おもろさうし」は、12世紀から17世紀初頭にわたって謡われた島々村々の歌謡を採録した沖縄最古の歌謡集です。

「おもろ植物園」は、この「おもろさうし」に謡い込まれた25種類の植物のうち、リュウキュウマツなど24種類を植栽培してあり、一つひとつの植物から遠い「おもろ」の時代の人々と自然とのかかわり合いを感じてもらうために造られたものです。

オモロ（旧ウムイ）とは、琉球の方言の中の沖縄、奄美諸島に伝わる古い歌謡を意味します。ウムイは「思い」の転訛であり、胸の中の思いを美辞に連ねて韻律的に表現したものの意です。

財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団広報誌

季刊誌 南ぬ風 春号 Vol.11 2009.4~6

編集・発行/財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団

2009年4月発行

〒905-0206 沖縄県国頭郡本部町字石川888番地 TEL.0980-48-3645(代) FAX.0980-48-3900

(財) 海洋博覧会記念公園管理財団公式サイト kaiyouhaku.jp

国営沖縄記念公園公式サイト oki-park.jp

MSA MSA-ES-390 JAB RE019 PRINTED WITH SOY INK Trademark of American Association